扇

a2200529　柳田英里

●制作意図●

私は小さい頃から歴史が好きで、日本独特の文化に興味を持っていた。
その中でも一番興味を惹かれたのが『扇』であった。
『扇』は平安時代の初期に、当時筆記用紙に代えて使用されていた「木簡」（長さ３０cm前後の細長い経木状のもの）から派生し、京都において創作されたのがはじまりとされており、それから現代まで形を変えながら、作られてきた。
扇のほとんどのものは木と紙で作られており、これまで扇面に漆を塗った扇を見たことがなかった。そこで、自分で漆を塗った扇を作ってみたいと考えたことがはじまりだった。

●デザイン●

乾漆と檜の板で制作

乾漆…高さ25センチ、幅・上4センチ、下2センチ

檜の板…高さ20センチ、幅・上3センチ、下2センチ

●制作行程●

●乾漆板
1、ガラス板に呂色を塗る（1～2回）
2、下地（細）付け（1～2回）
3、布着せ（3～5枚）
4、布目摺り
5、下地（細）
6、固め
7、呂色塗り
8、錆付け
9、錆固め
10、呂色塗り（1～2回）
11、ガラス板からはがし、扇の形に切り出す
12、中塗り　上塗り
13、加飾
14、組み立て
15、完成

2006年度 卒業研究ゼミ発表要旨集

●考察と感想●

最初に作った乾漆板は麻布を3枚貼り重ねた薄手のものとしたため、出来上がった乾漆板は0.5ミリの厚みであった。薄いため一枚一枚の反りが大きく呂色漆などを塗る工程が大変であったがしなやかな仕上がりとなった。
２回目に作ったやや厚手の乾漆板は麻布を５枚貼り重ね、下地も厚めに付けたため、出来上がった乾漆板はの厚みは約1ミリとなり、反りが無くなり全体の仕上がりも重厚なものとなっている。
扇の外形を作る事は簡単だと考えていたが、構造や開き具合など考えなければならない点が多数ある事に驚かされた。
扇の一枚一枚に漆を塗っていくという細かい作業は自分にとって苦手なことであったが、その分完成した時の喜びはとても大きいものだった。
この卒業研究は自分にとって、とてもよい経験になったと思われる。